

## 書評

### 段瑞聡『蒋介石と新生活運動』慶応義塾大学出版会(2006.11)

水羽信男

#### はじめに

著者の段瑞聡は1967年に中国で生まれ、祖国で学問的な研鑽を積み、その後、慶応大学へ留学し博士号を得た。その著者が、2003年に提出した博士論文を元を上梓したのが本書である。

「新生活運動」とは、中国国民党（以下、国民党）・国民政府の最高指導者である蒋介石がはじめた大衆動員運動で、1934年2月の提起から1949年1月、蒋介石の下野まで15年の長きにわたり継続された。本書は従来、中国共産党（中共）を支持する立場からは批判され、国民党系の研究者からは擁護されることが多かった蒋介石と「新生活運動」について、実証的に論じた貴重な歴史学研究成果である。

因みに本書が着目されていることは、深町英夫、小野寺史郎といった気鋭の研究者による書評が相次いで発表されたことにも示されている（前者は『中国研究月報』2007年5月号、後者は『近きに在りて』52号、2007年11月）。

#### 1. 内容の紹介

本書の構成は以下の通り。蒋介石研究の射程／新生活運動発動の背景—思想的側面を中心に／新生活運動の組織構造と蒋介石の権力基盤／蒋介石の権力の浸透と新生活運動—1934年を中心に／蒋介石の国家理念と新生活運動—1935～1937年を中心に／新生活運動と「抗戦建国」—1937～1945年を中心に／結論／蒋介石の対日認識—新生活運動の背景を例に。

著者は日本語・中国語・英語による研究を丹念に整理・批判し、本書の目的として、次の三点をあげた。①「新生活運動」をとりあげることで、中華民国史の欠落部分を補う。②蒋介石の思想を中華民国史のなかで再評価する。

③こうした分析を通じて中国政治の特質を解明する。それは全体として言えば、山田辰雄によって先鞭をつけられた国民党史研究を継承・発展させ、中国近代史を革命史の呪縛から解放し、政治史として理解するための研究と位置づけられる（この点については、山田辰雄『中国近代政治史（改訂版）』放送大学教育振興会、2007年も参照のこと）。

そのために著者が採用した方法の特徴は、以下の点にある。

A) 国民党・国民政府における蒋介石の権力基盤の不安定さへの着目。

従来、絶対的な独裁者として理解されることの多かった蒋介石に対して、近年の研究では、その権力の弱さをも含めて再検討している。本書も、蒋介石が自己の権力基盤を構築・強化するために「新生活運動」を発動・展開したとみなしている。また従来、ほとんど関心を払われなかったキリスト教と「新生活運動」との関係について着目し得たのも、こうした方法的な視座をもっていただといえよう。

B) 中華民国史を国民国家形成史として捉える視点の深化。

中国近代史を国民国家形成史と見なす視点そのものは、提起されて20年近く経つ。だが、著者は儒学的な伝統に基づく「固有道徳」の強調が、「国民」形成においてもった意味を研究することの必要性を発見し、さらにこうした蒋介石の思想形成を日本留学から受けた影響とあわせて検討している。この点に著者なりの独自性があるといえよう。

こうした方法的視座に拠りながら、著者は中国語史料だけでなく、従来、活用されてこなかった日本語文献も大量に駆使し、精緻な実証をおこなった。ここでは紙幅の関係から、本書の内容をごく簡潔に素描しておく。

著者は「新生活運動」からみる蒋介石の政治指導の特徴として、まず蔣が孫文思想に依拠して自己の政治的言説を組み立てようとしたが、党内基盤が不安定であるがゆえに、イデオロギーよりもパーソナリティ重視の組織化をおこなったと強調する。著者によれば、蒋介石の政治指導は排他的密室政治に基づく「越権指導」ともいうべきものだった。

また蒋介石は運動の展開のなかで大衆動員を通じて自己の権威を確立することを志向したが、一般国民の生活様式・意識の改革から経済建設へ移行するという「二段階式国家建設理念」を示すようになった。その長期にわた

る継続的な運動は、結果として近代国家の国民形成および抗戦建国の面において、一定の役割を果たした。とはいえ「新生活運動」は農村地域にまで浸透できなかった。またこの運動を進める政治システムも、地方を含む全国規模で確立されることはなかった。この点に国民党の中国支配の限界が端的に示されている。

これが本書が強調している点であり、著者は蒋介石の強固な一党独裁という通説的な理解を、「新生活運動」に即して実証的に批判したのである。あわせて著者は、国共両党がともに道徳を重視するという姿勢と「代行主義」的傾向を強くもっていたことも、その支配の特徴として指摘している。

## 2. 今後の課題

著者は貴重な成果を生み出し、評者も本書から多くのことを学ぶことができたが、ここでは評者の感想を一点に絞って述べ、著者と読者諸賢の批判を請いたいと思う。それは著者が「新生活運動」は「広大な農村部には及んでいなかった」とみなし、それを「蒋介石の政治思想の限界」だと指摘し(162頁)、さらに「それは蒋介石個人の政治指導の限界であるが、同時に国民党と国民政府の支配の限界でもあった」と述べた点に関わっている(251頁)。

たしかに評者も、「新生活運動」が中共の支配を経験した江西省において、国民党の支配を回復・強化するために始められた、という歴史的事実を否定するものではない。蒋介石が農村への運動の浸透を願ったのも、当然であろう。だが「新生活運動」は著者も指摘するように、そもそも都市から農村へという優先順位をもっていた(84頁)。

なによりも運動の開始時の目標は、①規則正しい生活規範の確立、②生活の各方面での清潔さの実現であり、日本との対立が深まるなか、蒋介石は①・②を中核とする生活の「芸術化」に「軍事化」と「生産化」を加え、人びとへ戦時体制に即応した行動様式を習得するよう求めた。こうした「新生活運動」の実現すべき諸課題は、まずは都市においてのみ実現の可能性が目指されるべきものだったように、評者には思われる。

如上の評者の印象が間違っていなければ、農村への浸透具合をもって「新生活運動」の限界を指摘するような方法は、「ないものねだり」ではなかろう

か。この点に関わって、著者が「新生活運動」のなかで組織された「郷村服務隊」800名足らずの活動を、「国家権力が社会の末端レベルまで接近した一つの表われ」とまで評価したことにも、評者は疑問をもっている（233頁）。国民党なりに農村問題に取り組もうとしたことについて、今後とも研究を深める必要があることは論を待たない。しかしながら中国の農村の広大さを前に、「郷村服務隊」の動きはあまりに微弱であったといわざるをえまい。

こうした著者の叙述には、毛沢東の「農村が都市を包囲する」というテーゼの影響をみることはできるのではなからうか。少なくとも評者には、著者は蒋介石・国民党にとって農村掌握という課題を極めて重視したため、たとえ小さな動きでも農村に関われば、その意義を過大評価する傾向をもっているように思われる。

だが評者は「新生活運動」の成果と課題は、まずもって都市部において検討されるべきだと考える。たとえば「新生活運動」が進められていた当時のリベラリストの構想した「国民」イメージは、蒋介石が「新生活運動」で創出しようとした「国民」とは異質のものであった。しかしながらこのリベラリストの「国民」イメージは、都市ではそれなりの影響力をもっていた。それゆえに蒋介石は『中国の命運』で共産主義とともに自由主義を厳しく批判したのであろう。

そうであるならば蒋介石・国民党の権力は、都市社会へどの程度の浸透力をもっていたと評価すべきなのだろうか。著者がいう国民形成に果たした「新生活運動」の役割について、都市に即してさらに考察する必要もあるように感じられる。

とはいえ本書が蒋介石・国民党研究に新地平を拓いたことは間違いない。以上の課題も本書の成果のうえでこそ、深められるべきものである。なお201頁で「音訳」のまま記載されたイギリス大使は、Cadogan, Sir Alexanderである。また276頁では中国語版『梁啓超年譜長編』を注記しているが、島田虔次編訳による岩波書店版（2004年）を使用すべきだろう。その他、逐一指摘しないが、校正不足かと感じられる点もあった。いずれも本書の評価にかかわる本質的問題ではなく、ごく瑣末なことであるが、一言指摘しておく。

(nmizuha@hiroshima-u.ac.jp)